

春初御消息

弘安五年一月二〇日 六一歳

伯 耆
ははき殿かきて候事よろこびいりて候。

春の初の御悦び、木に花のさくがごとく、山に草の生ひ出づるがごとしと我も人も悦び入って候。さては御送り物の日記、八木一俵・白塩一俵・十字三十枚・いも一俵給ひ候ひ了んぬ。

みやま
深山の中に白雪三日の間に庭は一丈につもり、谷はみねとなり、みねは天にはしかけたり。鳥鹿は庵室に入り、しょうぼく
樵牧は山にさしいらす。衣はうすし食はたえたり。夜は寒 苦
かんく鳥にことならず。昼は里へいでんとおもふ心ひまなし。すでに読経のこえもたえ、観念の心もうすし。こんじょう
今生退転して未来三五を経ん事をなげき候ひつるところに、此の御とぶらひに命いきて又もや見参に入り候はんずらんとうれしく候。

過去の仏は凡夫にておはしまし候ひし時、五濁乱漫の世にかゝる飢えたる法華經の行者をやしなひて仏にはならせ給ふぞとみえて候へば、法華經まことならば此の功德によりて過去の慈父は成仏疑ひなし。故五郎殿も今は靈山浄土にまいりあはせ給ひて、故殿に御かうべをなでられさせ給ふべしとおもひやり候へば涙かきあへられず。恐々謹言。

正月二十日

日 蓮 花 押

上野殿御返事

伯 耆
申す事恐れ入って候、返す返すははき殿一々によみきかせまいらせ候へ。